

ERP「Fit to Standard」と現場業務をつなぐ 国産ローコード開発

— AI時代を見据えた業務システム構築の最適解 —

ERP は業務にあわせてカスタマイズするのではなく、標準機能をそのまま利用する「Fit to Standard」が主流になっている。その一方で、ERP の標準機能だけでは、現場の業務要件に対応しきれず、業務とのギャップに課題を抱える企業も少なくない。

ERP 標準機能では、 現場業務に対応しきれない

かつて、ERPをはじめとする基幹システムは業務にあわせてカスタマイズするのが一般的だった。しかし、開発コストの増大やバージョンアップ時の対応負荷といったデメリットも多く、現在ではERPが提供する標準機能に業務をあわせ、カスタマイズを最小限に抑える「Fit to Standard」が主流となっている。

ここで問題となるのが、標準機能と現場業務の間に生じるギャップだ。ベンダーが想定する「あるべき業務プロセス」にすべての業務をあわせられれば理想だが、そうはいかないケースも少なくない。特に外資系ベンダーのERPでは、日本の商習慣に対応しきれない場合も多く、現場の慣習や既存業務フローとのギャップをいかに解消するかが大きな課題となる。

国産ローコード開発でアドオンするという アプローチ

このギャップを埋める方法としてまず挙げられるのが、スクラッチ開発だ。イチから開発することで、確実に業務にあったアプリケーションを開発できる。しかし、プログラミングスキルが求められるうえ、開発工数やコストも大きくなる。機能追加や改修といった継続的なメンテナンスも課題だ。

次に考えられるのが、SaaSの活用である。近年、多様なSaaSが登場しており、業務に必要な機能を迅速に導入できる。しかし、標準機能での利用を前提としているため、自社固有の業務要件に適したサービスが見つかるとは限らない。

もちろん、Excelなどを活用し、現場の運用で対応する方法もあるが、データの転記や集計、入力チェック、進捗管理など、人手に依存しやすく、担当者の負担増大につながりやすい。特に、受注から在庫確保、出荷までの進捗を可視化したいといったワークフロー型の業務では、複数部門間の情報共有や整合性維持、業務ルール変更などを運用することは限界がある。

この状況の解決策として有効なのが、ローコード開発ツールとデータ連携ツールを組み合わせ、必要な機能をERPの外部に“アドオン”するアプローチだ。ローコード開発ツールは、GUIで画面レイアウトやデータ構造を定義することで、最小限のプログラミング、またはプログラムを用いずにWebアプリケーションを開発できる。一方、データ連携ツールも同様にGUIで接続先やデータ変換、加工処理などを設定することで、システム間のデータ連携を実現する。いずれも短期間で効率的に開発でき、企業ごとの個別要件にも柔軟に対応できるほか、保守性にも優れている。

ローコード開発ツールやデータ連携ツールを選定する際は、機能面だけでなく、日本企業の業務に適しているかという観点も重要になる。まず挙げられるのが、商習慣への対応だ。例えば、稟議決裁における合議や段階的な承認など、日本企業特有の業務プロセスへの対応が求められる場面も多いが、海外製品ではこうした要件を運用で補わざるを得ないケースも少なくない。

また、導入後のサポート体制も重要なポイントだ。例えば、日本語のマニュアルや技術情報の充実度、問合せ時に迅速な対応を受けられるかは、安定運用に大きく影響する。海外製品では、本国へのエスカレーションが必要となり、回答まで時間を要する場合もある。こうした観点から、ERPと現場業務のギャップを埋めるソリューションとしておすすめしたいのが、キヤノンITソリューションズが提

生成 AI は、システム開発の救世主になるのか

昨今、注目を集めているのが生成AIによるシステム開発。コード生成の精度も向上し、「生成AIで十分ではないか」と考える企業もあるだろう。しかし、ここには課題が潜んでいる。

まずは、保守性だ。生成AIは同じ指示でも異なるコードを出力することがあり、再現性の確保が難しい。特に既存コードとの整合性を維持しながら、追加・変更が求められるエンハンスの際はその重要性が顕著に表れる。変更を加えた部分が一部でも、セキュリティや品質の確認を都度実施する必要がある、結局新たに作り直すというケースも多い。

そして、セキュリティや品質を担保するには人によるレ

ビューが欠かせないが、その負担は小さくない。「毎回」「すべての機能を」「同じレベルで」チェックするよう意識できる人材となると、相当ハードルが高くなる。

これに対し、ローコード開発は保守性に優れ、品質も維持しやすい。例えば、WebPerformerでは定義ベースの開発によりルールが明確で、仕様の把握や改修がしやすい。また、一定のセキュリティ対策がとれたアプリケーションを生成できるため、品質管理の負担も抑えられる。長期利用を前提とするのであれば、「ローコード開発をベースに、生成AIで開発をさらに高速化する」アプローチが理想だろう。WebPerformerでもこの形を実現すべく、AI活用の可能性を検討している。



提供するローコード開発プラットフォーム「WebPerformer」と、セゾンテクノロジーのデータ連携ツール「DataSpider Servista」だ。両製品は国産製品として豊富な導入実績を持ち、日本企業の業務要件に対応してきた実績がある。さらに、開発・サポートも国内で対応しており、ERP周辺システムの構築・運用を長期的に支える基盤として安心して利用できる。

複雑な業務要件にも柔軟に対応できる WebPerformer

WebPerformerの特長は、開発経験があればすぐに使える手軽さにある。ドラッグ&ドロップやプロパティベースの直感的な操作でWebアプリケーションを自動生成。さらに、ワークフロー構築ツール「WebPerformerWf」を利用すれば、複雑な承認フローや業務プロセスもGUIで簡単に実装できる。定義ベースの開発は仕様の把握がしやすく、担当者が変わってもメンテナンスがしやすい。また、さまざまな要件に対応できる柔軟性も強みだ。例えば、開発経験のない人による利用も想定したノーコードツールでは「フォーマット通りの画面しか作れない」「データ保存先は決められたクラウドのデータベースのみ」など制約がある場合も多いが、WebPerformerであれば「既存システムにレイアウトを近づけたい」「既存のデータベースをそのまま活用したい」などの業務要件にも対応できる。

特定の部門内で一時的に利用するアプリケーションであれば、ノーコードツールで簡易的に作成する方法も有効だが、基幹システムと業務のギャップを埋める場合、複数部門にまたがり、長期的に利用するケースが多い。開発・保守のしやすさと業務への柔軟性を兼ね備えているかを十分考慮することをおすすめする。

データ連携に特化した機能が揃う DataSpider Servista

DataSpider Servistaは、WebPerformerで構築したアプリケーションとERPや各種システム間でデータを連携する役割を担う。WebPerformerにもデータベースの参照や登録といった機能は用意されているが、「どのタイミングで処理を実行するか」など細かな

制御は別途実装する必要がある。DataSpider Servistaではメールやファイルの受信など多彩なトリガーが用意されているほか、通信障害時のリトライやロールバック、コード変換など、データ連携に特化した機能が揃う。これらをGUIベースで設定・管理するため、データの流れが可視化され、運用・保守の負担軽減にもつながる。また、50種類以上のデータベースやサービスとの接続に対応。SaaS活用が進むなかでも、柔軟なデータ連携を実現できる。WebPerformerとDataSpider Servistaの組み合わせにより、アプリケーション開発とデータ連携の両方をカバーできる。いずれもGUIベースで開発でき、高い柔軟性と保守性を備えるため、開発負荷を抑えて業務にフィットしたシステムを構築可能だ。ERPと現場業務のギャップを解消するアプローチとして有力な選択肢と言えるだろう。

< 事例・科研製薬様 >

SAPのFit to Standardを支え続ける開発基盤 -WebPerformer × DataSpider Servista-

医薬品の開発・製造・販売をおこなう科研製薬株式会社では、基幹システムとしてSAPを導入するにあたり、極力カスタマイズは行わずに利用する方針を採ったものの、画面や操作には使いにくさを感じる部分があった。



科研製薬株式会社

そこで、SAPの標準機能をベースに、画面設計や入力支援を含む周辺機能をWebPerformerで開発し、自社独自の要望を実現した。当時の開発では、経費精算ワークフローの電子化やマスタ連携をはじめ、申請内容をチェックする入力支援機能やWebPerformerWfを用いて自社の複雑なワークフローをノンプログラミングで実装し、限られた期間で効率的に開発できた。さらに、属人性・ブラックボックス化を防ぐ保守性の高さを活かし、社内の開発リソースに応じて外注も取り入れやすい体制を確立した。その後もWebPerformerシリーズの有効性を活かし、マスタ登録画面をはじめとしたSAPと連携する周辺システム領域で利用を継続。Fit to Standardを保ちつつ、社内のシステム開発基盤として活用領域を広げている。

その後もWebPerformerシリーズの有効性を活かし、マスタ登録画面をはじめとしたSAPと連携する周辺システム領域で利用を継続。Fit to Standardを保ちつつ、社内のシステム開発基盤として活用領域を広げている。

発行元

SAISON
TECHNOLOGY

株式会社セゾンテクノロジー

〒107-0052 東京都港区赤坂1-8-1 赤坂インターシティ AIR19F

E-mail: hulf_t_partners@hulf_t.com

Web: <https://www.saison-technology.com/>

掲載ソリューションに関するお問い合わせ

Canon

キヤノンITソリューションズ株式会社

WebPerformer お問い合わせ窓口

〒140-8526 東京都品川区東品川2-4-11 野村不動産天洲ビル

E-mail: wp_info@canon-its.co.jp

Web: <https://www.canon-its.co.jp/solution/industry/cross-industry/application/webperformer>